
朧月の夜に

全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朧月の夜に

【Nコード】

N0173F

【作者名】

全

【あらすじ】

ああ寒い！

だけども月を見に行きます！

(前書き)

B E T T A B E T A

「私は、朧月が好きだ。」

「彼もまた、朧月が好きだ。」

「好きでなければ、こんな寒い夜にわざわざ家から出たりしない。」

「……いや、私の場合、朧月が出たから外に出たわけでもない。」

「外は、まだ真冬なんじゃないか、と思うくらい寒いから。」

「もうすぐ三月なのに。」

「家の暖かさと朧月を私の中の天秤にかければ、家の暖かさが沈む。では何故外に出たか、というところ。彼と一緒に朧月を見ようと誘われたから、というわけである。」

「彼と家の暖かさを天秤にかければ、彼が沈んだ。」

「……うん。じゃ、また後でね。」

「彼からの誘いの電話を切り、服を着替える。太ももの半分くらいまでの丈のスカートに、お気に入りのコートに羽織って、その上からお気に入りのマフラーを巻いて玄関へ出る。」

「これまたお気に入りのブーツをせっせと履いていると、彼からメールが来た。」

「今どこ？」

「女は時間がかかるのよ。まだ十五分しか経ってないじゃない。」

「玄関を出た所、とだけ返して、あと三十分で明日になることに驚愕して、携帯を上着のポケットに押し込んだ。」

「まあ、今日は土曜日だから問題ない。」

「私の家から歩いて十分もかからない小さな公園の前に、彼は地面を見ながら立っていた。その首には、去年の誕生日に私があげた紺色のマフラーを巻いている。」

「息切れしながらも私が寄って行くと、彼は優しい笑顔でこちらへ」

近づいてきた。そして、公園の中にある小さなベンチを指差した。そこに座ろうと言っているんだろう。

大きな手が私の手をとり、優しく引つ張る。

街灯だけが辺りを頼りなく照らす公園に入っていく。見慣れた公園だけど、冬の暗さが印象をガラツと変えていた。

ゆっくりとベンチに座ると、ギシ、と嫌な音がした。

彼も、私の右側に、やはりギシ、と音をたてて座った。体を揺らす度に辺りに響くのが少し耳障りだ。

「寒いね」

彼は、溜息をついてから言う。息をするたび、白い息が立ち込めては消えてゆく。

「うん、そだね……寒い」

「知ってる？ 朧月の日の次の日は、雨が降るんだって」

「へえ、そうなんだー……」

彼はもともと持っていた暖かい缶のミルクティーを差し出すと、そう言った後に自分の缶コーヒーを飲んだ。

寒さでかじかんだ手を必死に使い、缶を開ける。

一口、二口、注ぎ込んでいく。甘く暖かいものが体に染み込んでいく。

一息ついて、とりあえず会話を繋げるために私は問うた。

「何で、雨降るの？」

彼は、私の顔を見つめて目を大きく見開いた。そしてまた空を見上げて、「んー……」と唸った。

私は朧月は好きだが、特別調べた事があると言っわけでもない。彼もそんなに詳しくはないのかもしれない。

ははーん、テレビで知った中途半端な知識ってわけだ。

「そうだ」

十秒経ったか経たないかぐらいの時に、彼は何かを閃いたよう出人差し指を立てた。

「朧月だから雨が降るんじゃないじゃなくて、雨が降るから朧月なんだよ」

「ほう、というと？」

立てた人差し指で、次は朧月を指差した。

「ほら、月の回りに雲が出てるじゃん」

なるほど、あれは雲なのか……。

「あの雲が、雨を降らす。……ってことじゃないかなあ……たぶん」
おお、すごい、なるほど、と返事をする。たぶん、という一言の
所為で説得力は無いけど、もしかしたら当たっているのかもしれない。
い。

帰って調べてみて、間違っていたらおちよくってやろう。

また暖かいミルクティーを飲むと、ひゅう、と冷たい風が吹いて
きた。露出した太ももを冷やす。彼のためだからって、スクートを
穿いて来たのが間違いだっただかな……。そう思って、太ももを撫で
た。

すると、彼は上に来ていた黒いジャンパーを脱いで、私の膝に掛
けてくれた。とても暖かい。

「え？ 寒いでしょ、いいよ」

嘘だけだ。

「僕はズボンだし。上だつて分厚いから平気だよ」

全然分厚くないじゃないの。それすつごく薄いじゃないの。口に
は出さなかった。

「お礼」

だから代わりに、左腕に抱きついて、手を握ってやった。

彼は微笑んで言う。

「ありがとう」

「うん」

大きな手は、冷たい。

彼の手を握り、肩に寄りかかりながら、朧月を眺めた。

彼の言ったとおり、雲がうつすら見える。星は全然見えない。

明日は雨かなあ……と、いうより、もうすぐにも降ってしまい

そつだ。折り畳み傘を鞆に入れた覚えはなかつた。
まあいいけど。

ミルクティーを飲み干してしまつた。彼も同じくらいのタイミン
グでコーヒーを飲み干した。私の手から空の缶を取ると、二つの缶
をベンチのすぐ傍にあるゴミ箱に放り投げた。

誰でも入るような距離なのに、彼がナイスシュート、と口にしたの
で私は少し笑つてしまつた。

そして、ふと膝にかかつた彼のジャンパーのポケットを見ると、
何か入っているのが見えた。

「ん？ これなに？」

私は手を伸ばす。

「え……。あ！ だめ、出さないで」

彼は右手で私の左腕を掴んだ。

彼の慌てつぷりを見ると、何かやましい物でも入つてるのかと思
える。

「何い？ 何入つてるのよー」

「べ、別に変なものじゃないよ……ほら、か、カメラ？ 月、撮る
ためだよ」

「ふーん……」

語尾が疑問系なので九十九パーセント嘘だらうけど、まあ、……
いいか。信じてやろう。

でも、あまり、いい気はしないなあ……。

私はポケットをあさろうとする手を引いて、もう一度彼の腕に抱
きついた。彼の右手はまだポケットの中の何かを握つたままだつた。
そんなに見せたくないのか……。

会話が途切れる。いつもは心地よい沈黙さえ、少し気まづくなつ
た。ちらつと横を見ると、彼は空を見上げていた。首疲れない？

まあ、他の所を見ている仕方がないので私も、空を眺める。

あーあ、雲が増えてきちゃつた。月も少しだけ見えにくくなつて
いる。

でも、彼の家も私の家もここからはそう遠くないので、折角だし彼との時間を大切にしようと思った。

「あのさ」

彼が沈黙を遮った。

「ん……」

彼は、私の膝に掛けたジャンパーのポケットをこそこそと探っている。お、やっと見せる気になったか？

私はジャケットが落ちないように掴んで、それを見ていた。

「さっきの……嘘」

「え？」

「ごめん、カメラじゃない」

わかってるわよ、というべきか迷ったが、彼のプライドのためにも黙っておく。

それよりも、言いたい言葉がある。

「そうなの？ ……じゃあ、何が入ってるの？」

彼は俯いた顔を、もっと下に向けた。心なしか、頬が赤く見える。何か言いたげなのに、口は固く閉じたまま。私は、彼の横顔を見つめる。

もうそろそろ何か喋らないと不自然だと思ったのか、彼はゆっくりと口を開く。

「ゆ、」

何、湯？

「びわ……」

「へ？ ビワ？」

私の中の好きな果物ランキング四位の名前を口にすると、彼はそれっきり黙ってしまった。

え？ 何？

湯でしょ、ビワでしょ。ビワ風呂？

……あ。

「指輪……？」

彼は小さく頷く。顔はさっきよりも赤い。少し唇をかんでいる。指輪……。

意味がキュピーンとわかってしまった私は、多分彼と同じぐらい顔が赤いだろう。

「え、だから……え……!？」

戸惑っている私を放って、彼は立ち上がった。そして、また空を見上げる。

足が少し震えているのが見えただけ、私の方が震えているに違いない。

そして、彼は、深呼吸をして。

ゆ、つくりと振り返って。

一度瞬きをすると。

私の左手を手に取り、指輪を私の薬指にはめて。

寒さと緊張に震えた声で。

「結婚しよう、涼子」

と、言った。

だから、私は、ベンチから立ち上がって。

精一杯、声を振り絞って。

短く返事をした。

頭が真っ白になって、考えもせず咄嗟に返事をしてしまった。

でもよく考えても、不満だって不安だって何も無かった。

私の頭の中には、彼との幸せな未来しか見えない。

「よかった……」

いつの間にか彼は私を抱きしめて、泣いていた。

いつの間にか私は彼に抱きしめられて、泣いていた。

「純、あいしてる」

「ああ、僕もだ……」

日を境に降り出した雨は、冷たくて。

だけど彼の大きな体が、暖かい。

私は、雲の隙間から覗く月に照らされ、そういえば今日は私達の三年目の記念日だったな、と思いつつ、とりあえずひたすら涙を流した。

(後書き)

B E T T A B E T A

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0173f/>

朧月の夜に

2010年10月8日15時09分発行